

**（1）「ダメな弟」18歳の転機** 2015年2月1日

喜多流大島家（広島県福山市）は、明治時代から続くシテ（主役）方能楽師の家で、僕で五代目になります。僕自身は物心つく前から祖父（喜多流能楽師だった久見（ひさみ）さん）の稽古が始まり、初稽古も初舞台（3歳）も記憶にないほど。自宅の能楽堂（喜多流大島能楽堂）の舞台上、いつの間にか出させられていた、というのが正直なところです。

今思えば、祖父は情熱的な人でした。稽古は問答無用の勢いで、やる気のない子供すら必死にさせるエネルギーにあふれていた。僕は、扇や竹の棒ではたかれながら、謡をおうむ返しし、仕舞をまね、理屈抜きに体で技術を覚えさせられました。内心は、放課後に近所で友達と遊んでいる最中に母が稽古だ、と呼びに来るのも、舞台上でじっと座っているのもつらかった。ずっと、「自分は能に向いていない」と思っていました。しかも、1つ上の姉（喜多流唯一の女性能楽師、衣恵さん）が優秀で、周囲も「出来の良い姉にダメな弟」という認識を持っていた。能自体は嫌ではなかったものの、当時は、決められた将来をどこか諦めて受け入れる気持ちがありました。

意識が変わったのは、高校卒業後、上京して（シテ方喜多流能楽師の）塩津哲生先生に師事してからです。18歳にして初めて他人から指導を受け、付いていけなければ置いていかれる、という恐怖を感じました。今までは身内がカバーしてくれたけれど、もう自己責任の世界だと実感したのです。それからは積極的に能と向き合うようになりました。

撮影：野村成次

**（2）初面で知った「異空間」** 2015年2月8日

能楽師としての大切な節目に「初面（はつおもて）」があります。それまでの子方（こかた）（子役）を卒業し一人前の能楽師として面をかける。僕は15、16歳のときでしたが、このとき、初めて能の“異空間”のようなものを知りました。面をかけることで、観客の目の前で舞台の中心に立っているのに、自分と向き合わざるを得なくなる。非常に閉ざされた世界にいる感覚になり、気持ちがどんどん内向してくる。世阿弥のいう離見（自身を客観的に見ること）という作用を、させやすくする効果があった。初面で、この未知の感覚を知ったことは大きな発見だったと思います。

大学入学を機に上京したのは前回、お話しした通りですが、親元を離れたことで、自分がいかに能楽師として恵まれた環境で育ったかも初めて分かりました。広島県福山市の自宅には僕が生まれたときから稽古場があり、2階には本舞台（喜多流大島能楽堂）がありました。今の能楽堂は3代目で、最初は曾祖父（喜多流能楽師だった寿太郎さん）が建てたものの戦災で失われてしまった。それを昭和23年に祖父（久見（ひさみ）さん）が再建し、さらに昭和47年、鉄筋コンクリート総ひのき造りの現在の能楽堂に建て直しました。祖父の口癖は「能を舞うには城が要る」でした。さまざまな人のご支援もいただきながら“城”を建て、僕たちを自然に能の世界へ導く流れをつくってくれたと思います。今、思えば、それこそが伝統の力で、いろいろな人の期待が自分の中に積み重なってくる気持ちが芽生えたように思います。

### (3) 忘れ難い英語能の成功

2015年2月15日



英語能「PAGODA」の北京公演

大島輝久さん（左）と旅人役のジュヴリス・モーアさん

能楽師として古典はもちろん、いろいろな新作能もやりました。その中でも2009年、欧州3カ国で初演した英語能「PAGODA（仏塔）」は忘れ難い作品になりました。英国人劇作家、ジャネット・チョングさんが宮島観光の途中、地元（広島県福山市の喜多流大島能楽堂）での僕たちの公演をごらんになり、感激された。「今日の舞台は素晴らしかった。私が長年温めている台本があるが、能で上演したいと思った」と、声を掛けてくださったのです。彼女の熱意に打たれ、米国人能楽研究家、リチャード・エマートさんのご協力もいただき、われわれも英語台本に型を付けるなどして能にする工夫を重ねました。

物語の舞台は1960年代、文化大革命の頃の中国です。ジャネットさんの家族がモデルで、彼女の中国人の祖母は混乱の時代、長男を救うため、泣く泣く英国行きの船に乗せた。後にジャネットさんの父となる方ですが、母子は現世で再会を果たせなかった。作品では、死後の世界で母子が再会する、という物語です。姉がシテで、僕がシテツレ。それぞれジャネットさんの祖母に当たる役、父役を演じました。全編英語で、日本語にない発音を謡風にやるのが難しく、台詞（せりふ）の多い姉は苦労していました。しかし、普遍的な家族の物語は英仏で非常に反応が良かった。この欧州公演の成功が2011年の日中両国での再演につながりました。

### (4) 生涯続く試行錯誤の道

2015年2月22日



です。

地元の喜多流大島能楽堂では、能の普及活動にも力を入れています。姉や妹が中心になって、岡山・広島両県の小中高校生を対象に、総合学習の時間などを使い、1年かけて舞台を勤められるまでお稽古をしています。本番の舞台では、子供たち全員が着物着用。実家には約100人分の着物と帯、袴がサイズごとにそろっていて、実家に帰るたび、母は袴を縫っています。日本の教育に、やっと日本の伝統文化が取り入れられたのですから、次世代に能を伝える種まきだと思って、家族総出で取り組んでいます。このほか、能の解説やワークショップも数え切れないほどやっています。これまではお弟子さん頼みで、ある意味、ガラパゴス化して立ちゆかなくなつた能を、大事にしている部分を決して損なわず、どう広報活動をしていくかは大きな課題

能の世界では40、50歳は、はな垂れ小僧。かつては、先輩方は理想の芸に向かって邁進しているものと思っていました。この年になって分かるのは、上手な人ほど迷い続けているということ。人間国宝のような名人ですら、衰えつつある肉体と向き合い、ご自分を鍛えている。この、試行錯誤し続けられる、ということがすごく大事な要素だと分かってきました。正解のない世界だからこそ僕も生涯、精進し続けたいです。

撮影：野村成次